

広島大学 大学教育研究センター 大学論集

第26集（1996年度）1997年3月発行：93-110

中国の民族学院における人材養成

－「民族平等」概念の変化－

小 川 佳 万

目 次

はじめに

1. 民族学院の誕生と拡大

2. 民族学院の変容

3. 「民族平等」概念の変化

おわりに

中国の民族学院における人材養成

－「民族平等」概念の変化－

小川佳万*

はじめに

1993年11月30日、中央民族学院は国家教育委員会の批准を経て、中央民族大学へと名称変更した。この名称変更の意義について、中央民族大学を管轄する国家民族事務委員会副主任の図道多吉は次の3点を指摘している。第一に、名称変更は中国共産党（中共）がこれまでずっと少数民族を尊重してきたこと、言いかえると少数民族教育に対する一貫した配慮の結果であること。第二に、同じく名称変更は中央民族学院自身が規模の拡大、質の向上に努力してきた結果であること。第三に大学に「昇格」したことで、今後総合大学としての質を常に問われることになり、より一層中央民族大学が発展することになること、を挙げている¹⁾。

「大学」と「学院」の名称については、1950年代の大学改革時（院系調整）に大枠として以下のような「基準」があった。それは文系・理系にまたがる基礎的な専業（文学、歴史学、哲学等及び数学、物理学、化学等）のある機関を「大学」と称し、応用的な専業（法学、経済学等及び工学、農学等。なおこれらは法学院、工学院等、単独で一つの機関をなしていた。）のある機関を「学院」と称していた。別の言い方をすれば、総合大学を「大学」と称し、単科大学を「学院」と称していたといえる。したがって、「大学」と「学院」とは元々役割の違う別個の機関であり、どちらが上であり、どちらが下であるかという議論は意味のないものであった。しかし、現在多くの学院が専業を拡大して文系・理系を備えた総合化を図り「大学」への名称変更を目指しているのも事実である。したがって、現在「大学」という名称の方が、「学院」よりも一般に好まれる（「上」とであると中国で理解されている）と考えて差し支えない。

とすれば、中央民族学院の名称変更は実質的に、大学に「昇格した」と言ってよい²⁾。大学に「昇格」するには当然、少数民族及び民族学院に対する中国共産党（中共）側の長年におよぶ理解があったに違いない。だが、それよりももっと重要なことは、図道多吉が第二に挙げた、中央民族学院自身が大学「昇格」に向けてひたすら大学改革を行ってきたことである。そこまで大学「昇格」にこだわるのは一体なぜなのだろうか。そして「民族平等」を象徴していると言われてきた民族学院の大学「昇格」という変化は、「民族平等」にどのような変更を迫っているのだろうか。本論文の目的は、民族学院の変容をの実態を明らかにしながら、中国における「民族平等」問題について考察することである³⁾。

* 広島大学 大学教育研究センター 助手

1. 民族学院の誕生と拡大

(1) 延安民族学院の誕生

我々は中国のまさしく主人
 漢, 満, 蒙, 回, 彝 一致団結
 今日各民族学習の仲間 明日は革命戦争の先鋒
 同志よ, 手をつなごう 民族革命の旗を高く挙げよう
 平等で幸福な各民族団結の新中国に向かって進もう⁴⁾

1940年初頭、毛沢東をはじめとする中共首脳部は、新しい教育機関の設置を目指した。それは、抗日戦争の激化・長期化による外的要因と長征による中共首脳部の少数民族に対する認識の変化という内的要因によって、その実現が焦眉の課題となったからであった。中共が勝利を収めるには何よりも少数民族の力が必要である。こうして抗日のための（その後の国共内戦のための）少数民族の人材養成を目的として⁵⁾、中共による第一の少数民族教育機関（民族学院）が、革命の聖地延安に誕生した⁶⁾。この延安民族学院こそ、現在13校存在する民族学院（大学）の原型であった。上記の詩は、その延安民族学院の校歌であり、ここで教鞭をとっていた宗群の回想によれば、学生たちは厳しい状況の下で、一緒に生活しながらこの校歌を高らかに歌っていたという。また開校当時学生は200余人で、8民族（蒙古族、回族、チベット族、イ族、ミャオ族、トンシャン族、漢族）からなっていた⁷⁾。8民族が、お互いに助け合い、共同生活を送りながら、明日の中国をつくるために一緒に学んでいる状況は、現在の民族学院のそれと基本的に同じであり、ここに「民族平等」のイメージを見て取ることはそう難しいことではない。

(2) 民族学院の拡大

国民党との内戦に勝利し、中華人民共和国を建国した中共にとって引き続き焦眉の課題の一つとなったのは、中共によって「解放」された少数民族地区（その多くは辺境地区）を管理する少数民族人材の養成であった。中共の長い模索の結果たどりついた、「民族平等」の大きなメルクマールとなる区域自治制度（少数民族地区は当該少数民族が管理する）を現実のものとするには、どうしても少数民族の政治幹部が不可欠であったのである。抗日戦争期が軍事幹部に傾斜していたのに対し、本格的な共産党政権が誕生した「解放」後は、政治幹部（日本的に言えば行政官）が強く求められた。したがって、中共の主たる関心が初等・中等教育の普及よりも、政治幹部養成を担う高等教育におかれたことは当然のことであった。

1950年11月に政務院（現国務院）第60回会議で「少数民族幹部養成試行方案」、「中央民族学院運営試行方案」を批准し、①政治幹部の養成・訓練が最重要課題であること、②そのために民族学院を設置すること、が国策として強調され、翌1951年に中央民族学院が誕生した。革命の聖地延安にあった民族学院を引き継いだのは北京に設置された中央民族学院であった⁸⁾。しかしそれだけでは、焦眉の課題となっていた巨大な国土の半分以上を占める少数民族地区の管理を担う少数民族人材の養成はまかない得なかった。そこで全国各地に中央民族学院と同様な性質の機関を設置しようとす

る動きがでてくる。中央民族学院とほぼ同時期に誕生した民族学院は、西北民族学院(蘭州市)、西南民族学院(成都市)、中南民族学院(武漢市)、広西民族学院(南寧市)、雲南民族学院(昆明市)、貴州民族学院(貴陽市)の6校であり、その後50年代後半に、広東民族学院(広州市)、青海民族学院(西寧市)、チベット(西藏)民族学院(咸陽市)が、文革後の80年代には西北第二民族学院(銀川市)、湖北民族学院(恩施市)が、そして90年代に入ると東北民族学院(大連市)⁹⁾が誕生した。上述の「少数民族幹部養成試行方案」には、「上記の目的(政治幹部養成のこと 筆者註)のために、北京に中央民族学院を設立し、併せて西北、西南、中南にそれぞれ中央民族学院の分院を設立する。必要があればさらに増設する。」と述べられていることから明らかとなり、地方の民族学院もその設置目的、役割は同じであった。細かく見ていけば、専業(学科)の内容に違いはあるが、基本的にどの学院も政治幹部養成機関であった。最も大きな違いとしては、中央民族学院が全国から学生を募集するのに対して、地方の民族学院は、その地方の学生を募集することであった。したがって中央民族学院は所在地が首都(北京)であることばかりでなく、全国各地の少数民族学生が学んでいるという点において「社会主義民族の大家庭」を最も象徴した機関としてしばしば言及されることになるのである。

(3) 民族学院のイメージ

民族学院は50年代当時から特に「民族平等」の象徴として、新聞や雑誌等で随時紹介されてきた。そこには、当然中共の少数民族政策の特徴(少数民族の各文化を尊重していること)を知らせる意味も含まれていた。例えば、中央民族学院副院長・熊寿祺の自校に関する紹介は以下のようになっている。

党の民族政策は各民族人民の宗教信仰と風俗習慣を尊重していますので、我々は党の政策に基づいて、この方面に尊重と配慮をしています。例えば、我が院ではラマ教とイスラム教を信仰する学生が比較的多いのですが、彼らが宗教生活を快適におこなえるように、校内にそれぞれ経堂と礼拝堂を建てたり、食事の面では別々の食堂を設けてその民族の調理人が料理をつくるようにしています。このようにして、我が院の学生はそれぞれの宗教を信仰し、自民族の衣服を着て、自民族の歌舞をし、好きな料理を食べられるようになっています¹⁰⁾。

このような紹介記事の内容は、60年代も変わらない。

飲食習慣に配慮するため、学校はいくつかの食堂を設けました。各民族の祝日も尊重されています。例えばチベット族の新年には学校はパーティーを行います。先日学生たちは祭日用の盛装をして踊りを楽しみ、教職員と一緒に過ごしました。学校はイスラム教を信仰する学生のために礼拝堂を設け、ラマ教を信仰する学生のために藏経堂を設けました。このような状況のため(学校訪問した・筆者註)代表者たちは深く感動しました。新疆の代表者は自分が貧しくて学校にいけなかったことを思い出しながら、目の前の元気な青年たちを見て、「ここは友愛の大家庭である！ここで勉強できることはなんと幸せなことか！」と言わずにはいられませんでした。「大家庭」、これはこの新疆の代表者個人の印象ではなく、中央民族学院を訪問する人の共通した印象である¹¹⁾。

そして80年代の中央民族学院に関する紹介記事でも基本的に変化はない。

彼(学生・筆者註)は私を宿舎に案内してくれましたが、ちょうど同じ部屋の仲間が6人ともいました。彼らは5地区からきた回族、チワン族、満族、トゥジア族の4民族の学生でした。お互いに仲良しで兄弟のようでした。ある時仲間の一人が食事の時間に間に合わなかった時、別の仲間が自ら進んで食べ物を買いにいき宿舎まで持ってきてくれました。日曜日にはよくみんな一緒に遊びに行き、楽しく過ごします。彼らはここで知識を学ぶと同時に、良好な感情を育むのです¹²⁾。

以上の紹介記事を見ると、それは他では見られない「差異」、つまり少数民族学生がここで学んでいること、その学生たちはお互い助け合って仲良く学生生活を送っていること、学校側(中共)は各少数民族のために特別な措置をしていること、そして写真が紹介記事と一緒に掲載されていれば、自民族の衣装を着た学生たちが一緒に写っている、という内容になっていることがわかる。

元来中共は「平等」社会の実現のために登場したのであった。中共が労働者・農民を代表する政党であるならば、当然第一に問われるべきことは、民族学院に労働者・農民出身がどのくらい含まれているのかということである。労働者・農民が多数進学していくことはそれだけ、開放的な社会であるということであり、「平等」な社会ということになる。

中共にとって少数民族全体が抑圧されてきた客体であり、したがって少数民族が多数進学してくることが、それだけ「平等」度が高いということになる。本来民族問題と階級問題は異なるのであり、厳密に言えば区別しなければならないが、「平等」の前に「民族」がつくことによって階級問題は背後に退くのである。したがって民族問題の紹介記事で階級のことがほとんど触れられていないのはそのためである¹³⁾。

こうみえてくと民族学院の「民族平等」のイメージは、いろいろな民族が、お互いの異なる文化を尊重しながら校内で共同生活をしていることによって生まれるものであることがわかる。これは延安民族学院時代のイメージ(8民族が明日の中国のために共同生活を送っていた)と基本的に変わっていない。

このイメージを敷衍すれば、少数民族学生が多いほど「民族平等」になる。また民族の種類が多いほど平等である。「差異」の強調度の度合いが「民族平等」の度合いになる。この点で、他の機関にはみられない少数民族関係の専業が設置されている民族学院の方が、「民族平等」の度合いが強いことになる。また雲南民族学院よりもほぼ全民族をカバーしている中央民族大学の方がより「民族平等」であるということになる。中央民族大学はこれらの意味において、少数民族高等教育、さらには少数民族教育の中心になり得るのである。

上記の紹介記事を読めば明らかなおおり、対外的に「差異」を強調する「民族平等」は、対内的には各民族を平等に扱うこと、すなわち特定の民族に偏らないことも意味する。したがって民族学院はウイグル族のための学院であっても、ウイグル族のためだけの学院ではない。あらゆる民族に対して常にバランスを保つのである。特に信仰が厚いといわれるイスラム教徒に対して礼拝堂を建てれば、同じように信仰の厚いとされるラマ教信者に対しても藏経堂を建てるのである。イ族の伝統的祭日を祝う日を設ければ、タイ族に対しても同じように設けるのである。このことは、各民族学院の所在地にも現れている。どの民族学院も各地方の中心都市、つまり非民族(漢族)地区に置かれていて、涼山イ族自治州や延辺朝鮮族自治州にはないのである。バランスを保つ民族学院はど

の民族からも等距離になければならないからである¹⁴⁾。

2. 民族学院の変容

(1) 非正規機関から正規機関へ

延安民族学院時代の緊迫した状況で、中共支配地域拡大のために少数民族の指導者（軍人）を1人でも多く養成しようとするれば、当然のことながら教育期間は短く、教育内容は軍事的、政治的なものになる（「マルクス・レーニン主義」、「中国革命問題」、「民族問題」等の思想政治科目が中心）。そしてこの性質こそ中共の解放区型大学に共通するものであり、民族学院の原初的形態であった¹⁵⁾。そして50年代の民族学院は明らかに解放区型大学の性質をそのまま引き継いだ政治学校（どの民族学院にも「幹部訓練部」が設けられそれが中心）であった。これは緊迫した状況の意味合いは異なるにしても、「解放」後も1人でも幹部が欲しいことには変わりなかったからである。だが、自治区、自治州、自治縣等の少数民族地区に一通り幹部が配置できた後は、それほど大量の政治幹部を養成する必要はなくなる。こうして、解放区型大学の短期間大量養成というゲリラ的色彩を徐々に薄めていくことは、民族学院の発展にとって不可欠な作業となる。高等教育機関として設置された民族学院が高等教育機関としての体裁を整えていくのは、まさに政治幹部養成部門である「幹部訓練班」の減少と時期を同じくしていた。以下の表1、表2は開校当時（両校とも中央民族学院と同年の1951年）当時から卒業生数の統計が整理されている西南民族学院と雲南民族学院のものである。表1は西南民族学院の課程別の卒業生数を5年ごとに区分して示したものである¹⁶⁾。ここから一見して明らかなおと、開校当初の50年代前半は政治幹部養成のための幹部訓練部の卒業生がほとんどを占め、50年代後半は、中等教育レベルの中等専科の卒業生が急増し、さらに、高等教育入学に必要な基礎学力をつけるための予科の卒業生数がそれに続いていた。この表で、本来高等教育と呼べるのは本科（4年制）と専科（2年制）であり、専科が多数を占めるのが70年代後半、本科が中心になるのは80年代に入ってからである。そして80年代後半には、西南民族学院は4年制の本科中心の高等教育機関になっていることがわかる。

表1 西南民族学院課程別卒業生の推移

年	幹部訓練	予科	本科	専科	中専	計
1952-1955	2059	21	0	56	88	2224
1956-1960	2291	1596	0	443	2512	6942
1961-1965	757	161	340	535	939	2732
1966-1968	314	0	136	29	319	798
1975	143	55	0	0	0	198
1976-1980	392	194	0	732	0	1318
1981-1985	508	398	1755	115	31	2807
1986-1990	25	411	2330	211	63	3040
合計	6489	2936	4561	2121	3952	20059

出所)『西南民族学院院史1951-1991』四川民族出版社, 1991年, 279頁の表より作成。

表2 雲南民族学院専攻領域別卒業生数

年	幹部訓練	文芸班	予科	漢語	民語	人文	社会	外国語	数理	計
1952-1955	4288	0	0	0	0	0	0	0	0	4288
1956-1960	2725	786	0	0	0	0	0	0	0	3511
1962-1964	725	942	45	0	0	0	0	0	0	1712
1968	494	0	0	0	0	0	0	0	0	494
1974-1975	0	0	0	326	0	0	199	0	0	525
1976-1980	574	0	0	241	152	0	445	0	0	1412
1981-1985	414	0	447	310	120	137	470	0	187	2085
1986-1990	418	0	886	282	186	309	1271	274	730	4356
合計	9638	1728	1378	1159	458	446	2385	274	917	18383

出所『雲南民族学院四十年1951-1991』雲南大学出版社, 1991年, 128, 129頁の表より作成。

表2の雲南民族学院のケースもほぼ同様である。この表も5年ごとに区切っているが、表1とは項目が変わっているのに注意が必要である。表1の幹部訓練部に相当するのが、左2つの幹部訓練と文芸班である。漢語から右の項目はそれぞれの専攻領域の本科と専科を合わせた卒業生であり、本来の高等教育にあたる場所である。西南民族学院と同様、50年代から60年代の雲南民族学院は明らかに幹部養成機関であったことがわかる。ただし、その後幹部養成分野の卒業生数は減少し始め、70年代から本来の高等教育機関になっていくことは西南民族学院と同様である。幹部訓練部の卒業生が減少し、本科・専科の卒業生が増加していくことは、学歴・文化水準を問われなかった学生（多くは在職者であった）から、何らかの学力検査を経た学生が入学してくることを意味した。こうして高等教育機関としての使命をすたすたに果たしていくことになるのである。

(2) 専業（専攻）の変化

文革後専業数がどの学院も増加したことは確かに全体的な傾向と言える。本来の目的であった政治幹部の養成が減少していき、本科・専科の学生数が増加したとき、どのような専業が拡大してきたのだろうか。

まず先ほどの表2の雲南民族学院のケースをみると、70年代前半から漢語系と政治、経済といった社会科学系の卒業生を輩出したが、その後圧倒的に拡大していくのは、経済分野を中心とした社会科学系である。また、それ以外に卒業生増加が著しいのは、物理、化学、生物といった数理系である。したがって雲南民族学院の場合、学生数増加の主たる要因はこの2領域を専攻する学生数が増加したことによるといえる。また専業も文系・理系にまたがり総合大学化してきていることがわかる。

次に中央民族学院のケースについてみると、以下の表3の数字は80年代以降の学生数である¹⁷⁾。この数字は卒業生の数ではなく、その年月時点での中央民族学院に在籍していた学生数を専攻領域別に分けたものである¹⁸⁾。表3から中央民族学院も文系・理系にまたがり、拡大してきていること

がわかる。

1983年時点で学生数の最も多かったのは少数民族言語関係の専攻であり、続いて政治・法律・経済領域を含む社会系であった。50年代の中央民族学院で中心であった幹部訓練部は、80年代に入って減少の一途をたどっている。この動向で顕著なのは、雲南民族学院と同様、社会系と数理系の学生数の増加という現象である。

表3 中央民族大学の専攻領域別学生数の推移

専攻領域	1983年4月	1987年9月	1991年11月	1995年10月
幹部訓練部	357	324	137	—
予科	288	504	351	216
社会系	499	554	523	606
人文系	216	383	320	428
外語系	系なし	38	103	111
漢語系	353	353	237	282
民語系	583	643	461	422
芸術系	253	402	379	478
数理系	430	406	507	620
大学院	26	155	190	—
合計	3006	3911	3208	3163

出所) 現地で収集した資料をもとに作成。

註) 「—」はデータなし。

さらに同様の傾向は、近年開校した湖北民族学院、東北民族学院でも見て取れる。50年代に設置された「旧」民族学院と異なり、文革後に設置された「新」民族学院は、少なくとも政治幹部の大量養成という歴史的課題からは解放されていた。それに代わる専攻としては、湖北民族学院の場合、少数民族言語系ではなく漢語系が、また数学、電気、林学等の理系と財務会計、公共関係等の社会科学系である。また東北民族学院の場合、もっと明確に国際金融、国際貿易専攻、会計専攻などの社会科学系とコンピューター及び応用、電子工程、食品と栄養衛生等の理系のみで占められているのである¹⁹⁾。つまり、「新」民族学院は、上記2校の民族学院の傾向を最も端的に表現したかたちで専攻が設置されていることである。

以上のとおり、民族学院の専攻の趨勢がほぼ同じ傾向を示していることは、まぎれもなく中共の意思がここにあることを意味する。どの国の高等教育でも、多かれ少なかれ職業との関連はもっているが、中国ほど高等教育で学ぶ内容と職業とが直結している国は他に見当たらない²⁰⁾。とすれば、民族学院の専攻構成の変化(経済系、理系重視)は、中共が明らかにこの分野の人材を欲しているのがわかるのである。

(3) 民族別学生数の推移

専業数の拡大及び特定分野の集中増加という目に見える改革が進行する一方、その陰に隠れて目立たないが、民族学院の民族構成をも徐々に変化してきた。

もともと50年代当初から、民族学院はマジョリティたる漢族を全く排除するものではなかった。延安民族学院時代も漢族の学生がいたことが宗群の回想からわかるし、現在の民族学院設置の法的根拠となった「培養少数民族幹部試行方案」(1950年)には、「各少数民族の解放事業と建設仕事を助けるために、少数民族工作を希望する適度な数の漢族幹部を養成しなければならない。」と述べてある。この文面からは、しかしあくまでも少数民族の幹部養成が主であって、漢族幹部の養成は付随的なものであることがうかがえる。実際、このことを明確に規定している中央民族学院(大学)では、学生募集要項(『中央民族学院招生簡章』)に「漢族学生は10%を越えない範囲で入学させる」と明確に記し、また受験生が全国統一入試にあたって志望校を願書に記入するときに参照する『招生報』にも同様のことが書かれてある。では実際どのくらいの漢族学生が民族学院で学んでいるのだろうか。

表 4 中央民族大学の民族別学生数

年	1983年4月	1987年9月	1991年11月	1995年10月	合 計
回 族	336	478	400	497	1711
ウイグル族	292	610	394	214	1510
蒙 族	356	316	319	281	1272
チベット族	415	285	192	215	1107
漢 族	110	207	255	395	967
朝 鮮 族	242	252	197	228	919
チワン族	158	326	188	143	815
満 族	87	229	204	266	786
イ 族	137	140	121	128	526
ミャオ族	124	135	139	97	495
10民族合計	2257	2978	2409	2464	10108
学 生 総 数	3006	3911	3208	3163	13288
10民族学生数/学生総数	75%	76%	75%	77%	76%
民族学生数	53	52	53	48	

出所) 現地で収集した資料をもとに作成。

表 4 は、中央民族学院の学生数を、民族別に見たものである。表のスペースの関係で、この4年間の在籍学生の多い順に10民族を掲載した。この10民族で、どの年も4分の3を占めている。年が4年ごとなのは、表 3 と同じ理由である。中国は現在56の民族で構成されている。とすれば中央民族学院の民族数が1983年で50民族、1995年でも48民族で構成されていることは、確かにほぼ全

民族が在籍していることになり、多民族国家の縮図として十分その役割を果たしているといえる。だが、ここで注目したいのは、漢族の学生数の増加である。1983年で全学生に占める漢族学生の割合が3%であったのが、1987年に5%、1991年に8%、そして1995年には「漢族学生は10%を越えない範囲で募集」という規定を越えて12%にまで上昇した。しかも1995年には学生数が回族に次いで2位の位置を占めるまでに量的に拡大してきているのである。その一方で、ウイグル族、蒙古族、チベット族といったこれまで量的に多数を占めていた民族の学生数の減少が目立ってきている。わざわざ少数民族のために、少数民族人材を養成するためにつくられた高等教育機関で無視できないほど多数の漢族学生が学んでいることは従来の民族学院のイメージを根本的に覆すものである。以上のような、漢族学生の増加という傾向は中央民族大学だけに限ったことではなく、西南民族学院、雲南民族学院でも同様である²¹⁾。特に雲南民族学院は50年代からの民族別の統計があるため学生数の増減がはっきりする。以下の表5は、雲南民族学院の卒業生数を民族別に5年ごとに区切って見たものである²²⁾。

表5 雲南民族学院民族別卒業生統計表

年	1952-1955	1956-1960	1962-1964	1968	1974-1975	1976-1980	1981-1985	1986-1990	総計
イ 族	830	546	313	139	91	302	436	879	3536
タ イ 族	781	839	269	38	72	260	216	252	2727
漢 族	475	178	204	38	8	31	68	1262	2264
ハ ニ 族	331	317	162	35	44	127	106	191	1313
ペ ー 族	122	91	47	20	17	35	338	622	1292
リ ス 族	268	269	132	40	66	146	69	112	1102
回 族	232	84	23	13	8	43	328	271	1002
ミ ャ オ 族	166	177	110	60	49	91	65	92	810
チ ン ポ ー 族	205	251	128	24	14	74	40	40	776
ワ 族	138	193	127	26	43	62	60	79	728
10 民族 合計	3548	2945	1515	433	412	1171	1726	3800	15550
学 生 総 数	4288	3511	1812	494	525	1412	2095	4398	18535
10民族学生数/学生総数	82%	83%	83%	87%	78%	82%	82%	86%	83%
民 族 数	24	23	22	20	23	25	28	29	

出所)『雲南民族学院四十年1951-1991』雲南大学出版社, 1991年, 130頁の表より作成。

表4同様、スペースの関係で卒業生の多い民族の上位10位を掲載している。民族数が中央民族大学の約50と異なり、雲南民族学院が約25なのは基本的に雲南省のみから学生を募集するためである。したがって民族数が20以上あることは決して少ない数ではない。中央民族学院同様、上位10民族で全学生の80%ぐらいに達している。ここでも注目すべき点は漢族学生の増減である。表5をみれば明らかなおとおり、最初から相当な数の漢族がいたことがわかる。その後減少していき、70年代には

わずかな数しかいなかった。それが80年代後半には極端なほど増加し、現在卒業生数第1位になっている。漢族の占める割合も29%にまで上昇し、実に卒業生の10人に3人は漢族ということになる。こうしてみると、民族学院には少数民族だけが学んでいるとか、民族学院には漢族がわずかにいると一般に言われる説明は不適切であると言わなければならない。

また上記の変化とともに中央民族学院の学生の出身地も変化してきているのである。

表6 中央民族大学学生の出身地別統計

年	華北	東北	西北	華東	華南	西南	内 蒙 古 ・ 新 疆	青 海 ・ チ ベ ット	その他	計
1983	70	380	265	100	355	685	728	381	42	3006
1987	212	488	323	188	547	743	1113	297	0	3911
1991	299	385	276	226	534	525	876	219	9	3349
1995	329	471	276	353	392	472	556	251	0	3163
合計	973	1724	1140	867	1828	2425	3273	1148	51	13429

出所) 現地で収集した資料より作成。

表6は、中央民族大学の学生を出身地別にみたものである。表4から漢族学生が増加する一方で、これまで中央民族大学で多数を占めていたウイグル族、モンゴル族、チベット族が減少してきていることを示したが、それにともなって表6からもその主たる「供給源」であり、政治的にも重要な意味をもつ内蒙古・新疆地区、青海・チベット地区の学生数が減少してきていることがわかるのである。それに代わって増加が著しいのは、北京・天津とその周辺の華北地区、上海とその周辺の華東地区である。中央民族学院には辺境地区の学生が多いというイメージは若干であるが薄らいできていることがここからわかるのである。

3. 「民族平等」概念の変化

(1) 中共の政策転換と「差異」の解消

周知のとおり、中共の政策が文化大革命終結をもって、政治主義から経済主義へ根本的に転換した。この時、辻康吾も指摘するとおり²³⁾、中共自身が「社会主義は全ての事物で資本主義より優越している」という認識を改め、「中国の経済、文化が立ち後れている」と認めるに至った。そしてこの認識から導かれて、少数民族政策の基調は「事実上の不平等」の解消に向かうことになった。社会主義の段階に入り政治的には平等を達成したが、経済的・文化的には不平等（事実上の不平等）が存在する。現段階は各民族が共同に繁栄する時期であるので、まず物質的な面（経済的な面）の格差を是正することが最重要課題となる。

こうした地域格差問題を背景に置いた経済的な平等観は、「遅れ」ている少数民族地区の生活水準を向上させる原動力となる一方、その「遅れ」は、国民所得の差として、工業生産額の差として、さらには学力差として我々の前に目に見えるかたちで迫ってくることになる。ここからその「差

異] = 「後れ」を問題とし、その解消を民族学院改革の課題とする論文が民族学院の教師により書かれるようになった。例えば、中央民族大学の教師陣の学歴が低いこと、教授・副教授の人数が少なすぎること等の問題点を指摘したり²⁴⁾、学生の学力差が授業に支障をきたしていることを指摘している論文²⁵⁾が登場することは、中共が自らの国家を後れていると認めたように、民族学院自身も自らを後れていると認めたことを意味する。

そしてこの「後れ」を払拭したいという力こそ民族学院の発展の原動力であった。この原動力は、普通高等教育機関に一步でも近づくこと、理工系を拡充することによって総合大学の道を歩むこと、本科を中心とした構成にしていくことなどへ向かった。上述の民族学院のラディカルな変化はこの力に動かされたものであったのである。中央民族大学にとって今や自慢すべきことは、博士課程をもっていることや国家レベルの研究をいくつか抱えていることであって、もはや全民族が学んでいるという「差異」ではなくなりつつあるのである。このような状況下での民族学院における漢族学生の増加という現象は、依然として漢族と少数民族の間には目に見える学力差があることを示す一方で、「民族平等」の意味が少数民族に対する平等から少数民族地区の平等へ変化してきたことを示しているのである²⁶⁾。なぜなら「後れ」ている少数民族地区を、経済発展させること（格差解消）、そこで活躍する質の高い高級人材を養成することが第一に重要なのであり、その高級人材が漢族であるか少数民族であるかは二次的な問題になるからである。

(2) 民族学院のジレンマ

こうみえてくと80年代からの民族学院は対内的には学生の質（学力）の向上へ、対外的には総合大学へ昇格すること、換言すれば、対外的に「差異」を強調する平等から「差異」を解消する平等へシフトしてきていることがわかる。「はじめに」で述べた中央民族「大学」への昇格はひたすら「差異」を解消しようとしたまさに努力の結果だったのである。そして、図道多吉がいみじくもその意義として第三に挙げたとおり、名称を大学に変更したことで、内外に普通大学であること、中央民族大学のライバルは他の総合大学であることを宣言したのである。そして、そのことによって比較不可能な独特の位置を占めていた民族学院が他の普通高等教育機関との比較によってその位置を示していかなければならなくなったのである。民族学院が質の向上を目指すのであれば、極端に言えば、本科だけに限定すればそれなりに向上する。だが、そうすることは、本来民族学院誕生の必要条件であった少数民族をある意味で否定していくことであり、そこまで踏み込むこともできないのである。それは現在もなお、「差異」強調の力が消滅していないことを意味する。したがって専科も予科も、そして現在では、背後に退いた感がある幹部訓練部も、廃止することもできないのである。そして必然的に民族学院は多様な形態になる。しかしその一方で、「差異」を重視しすぎれば、民族学院は高等教育機関であるという名称を返上しなければならなくなることも事実なのである²⁷⁾。

結局民族学院の難しさはこの両者調和の上に、自らの存在価値を示さねばならないことにあると言える。

おわりに

以上本論で「民族平等」概念が変化してきていることを民族学院の変容を通して明らかにした。

「差異」にこだわる「民族平等」のイメージは、どの職場・学校に行っても少数民族が一定数働き、学んでいることである。日本の国会に当たる全国人民代表大会に少数民族の議員が人口比以上にいること、中央官庁の役人に少数民族が人口比以上に登用されていることなどはこのイメージを最もよく具現化したものである。このためにこそ50年代の政治幹部養成の意味があった。

それに対して、80年代以降の、経済格差是正の「民族平等」のイメージは、どの少数民族地区に行っても都会と同じように工場があり、学校があり、商店があることである。人々の暮らしぶりが都市と農村で変わらないことである。そして、現在民族学院は「民族地区を平等」にするという任務に邁進している。そのためには、たとえ漢族学生が増加することになろうとも、質の向上に常に留意しなければならないのである。それは各少数民族を見捨てるという意味ではなく、少数民族地区を漢族地区と同等にするという積極的な意味の中に解消されるべきものである。

そしてこの変化は、まさに少数民族教育とは少数民族地区で行われる教育（地区優先）なのか、少数民族に対して行われる教育なのか（エスニシティ優先）なのかという現在でも解決されていない問題に絡むものであった。ただし本論で対象にした民族学院のケースから、ここでいえることは、高等教育に民族的「差異」の論理はなじみにくいということである。つまりその発展の度合いは、多数の民族で構成されていることによって示されるというよりも、どうしても一般高等教育機関との比較によって示されることになる。このことは、高等教育の性格がもともと個々の「民族」というより、「国民」（ナショナル）さらには普遍的なものを指向していることと関係している。

民族学院において、漢族学生の割合を低下させようとするれば、言い換えれば民族としての「差異」にこだわり続けたいのなら、各少数民族地区の少数民族学生の学力を高め、大学受験を目指す少数民族学生の数を拡大させる必要がある。その地区で漢族と競り合うほどの量と質を備えなければ、大学入試というハードルがある以上、それは不可能であろう。そしてこの問題は、質の向上に重点をおく民族学院に新たな影響を与えることになるのであるが、この問題の解決はもはや民族学院の範疇ではない。そこで我々の関心は少数民族地区の初等・中等教育に向かうことになるのである。

註

- 1) 「抓住機遇開創民族院校改革發展的新局面」『民族教育研究』1994年第2期, 20, 21頁。
- 2) 現実に1994年第2期の『民族教育研究』はこの名称変更を祝うために特集号がくまれている。
- 3) 民族学院は「民族平等」の象徴と言われるだけあって、これまで新聞、学術雑誌等で言及されてきている。だが、実態を正確にとらえずに、皮相的な概説にとどまっているか、またはきちんとした証拠に基づいて論じているものでも、その時点での具体的な課題（教師陣の質、学生の質など）に単発的に答えようとしているものでしかない。具体的な証拠に基づきつつ民族学院をもつ

と広い視野から「民族平等」との関連でとらえようとする研究は皆無である。民族学院が「民族平等」を象徴しているのならば、それがどのような意味で「象徴」なのかを検討しなければならない。ところが、中国ではそれは所与のものとして、それ以上疑うことを許されてこなかった。民族学院に関しては依然として不明な点が多い。

- 4) この詩は延安民族学院の校歌である。宗群「紀念延安民族学院建立四十五周年」『中央民族学院学報』1986年第二期，20頁。
- 5) 延安民族学院の修業年限は6年で2年ずつの3期に分け、1年のうち11カ月間の学習，そのうち生産労働が2カ月である。クラス編成は研究班，普通班，文化班に分かれていた（後に回族班，蒙古班という民族別の編成もできる）。規則上は6年であったが，当時の緊迫した状況を反映して，それ以前に卒業したようである（宗群「紀年延安民族学院建立四十五周年」『中央民族学院学報』1986年第二期，18頁）。
- 6) 覃録輝編『中央民族学院 建校四十周年教学科研成果展冊 1951-1991』精美彩色印刷有限公司，1991年，5頁。

中国近代の少数民族高等教育の起源は，清朝末期の1908年に設置された満蒙高等学堂まで遡れる（謝啓晃編『中国民族教育史綱』広西教育出版社，1989年，59頁）が，現在（中共）の少数民族高等教育の原型は延安民族学院に求められる。なお，さらに細かくみれば，「延安民族学院」の前身として「病北公学」の少数民族工作隊があげられるが（張騰霞編『中国共産党的幹部教育（抗日戦争時期）』中国人民大学出版社，1988年，250頁），少数民族に関する一つの独立した学校となるとやはり延安民族学院が最初である。

- 7) 宗群「回顧与展望—從延安民族学院到中央民族大学」『民族教育研究』1994年第2期，45頁。
- 8) 延安民族学院は，正確に言えば，「解放」前，他校と合併したり，所在地を変えたりしながら，最終的に1948年に三辺の幹部学校と合併し，その歴史の幕を閉じた。

中央民族学院の前身校としては，中央民族学院自身が前身校を延安民族学院としていること（宗群，前掲論文），かつ延安民族学院の要人がそのまま中央民族学院に移動してきていることから明らかである。例えば中央民族学院初代院長烏蘭夫，初代共産党委員会書記劉春は，それぞれ延安民族学院の教育処，研究所で働いていた。

- 9) 東北民族学院の成立は事情は少し複雑である。校舎はすでに完成し，校門には「東北民族学院」という文字が掲げられ，実際1993年から学生を受け入れている。教師も生徒もいて確かに授業も行われ，卒業生も出しているという意味で大連民族学院は実質に存在している。だが国家の許可がまだおいていないので，現在，正式には「中央民族大学のある部分の専業を大連で行っている」となっていることが筆者の現地調査で明らかになった。したがって東北民族学院の学生は正式には中央民族大学の学生ということになる。
- 10) 『光明日報』1956年11月16日付。
- 11) 『人民日報』1961年12月2日付。
- 12) 懷魯「培養民族幹部的搖籃—訪中央民族学院」『瞭望』1985年23期，15頁。
- 13) ただ，このことによって階級問題を問う必要がなくなったことにはならない。民族学院に入学

してくる学生がどのような出身なのかを問うことは非常に重要な問題である。

- 14) これは少数民族学生たちとのインタビューから明らかになった。民族学院の中で例外は広西民族学院の所在地が広西チワン族自治区の区都南寧市であることである。ただし南寧市が自治区内で最も発達した都市であり、少数民族の人口比が低いという点を指摘できる。また、その他の理由としては、教師陣の問題や教育環境問題も挙げることができよう。
- 15) 大塚豊『現代中国高等教育の成立』玉川大学出版部、1996年、71-104頁に詳しく述べられている。
- 16) 卒業生を出していない年や、文化大革命のために学院を閉鎖した時期があるので、必ずしも表の年の区切りが5年毎になっていないところがある。
- 17) 中央民族学院教師の説明によれば、文革以前の中央民族学院の学生数に関する統計は文革の混乱によって紛失し、誰もわからないとのことである。なお80年代以降の非常に貴重な資料を見せてくれた関係者の方々にここで感謝の意を記すことにする。
- 18) 間隔が4年ごとであるのは、同じ学生を重複して数えることを避けるためである。つまりこの数字は学生総数、つまり幹部訓練部・予科・専科・本科の学生数を全て含んでいるが、本科の学生が最も多いことと、4年が最も長期の修学年限であるため、4年ごとの学生数を記せば、1983年でカウントした学生を1987年で再びカウントすることはほぼないと判断したためである。なお本科以外は4年より短いサイクルで学生が入れ替わっているため、4年ごとではカウントされない学生も少なからず存在するが、4年ごとでも大まかな傾向は把握できると考えられる。
- 19) 湖北民族学院については、国家教育委員会計画建設司『中国高等学校大全（第二版）』高等教育出版社、1994年、277頁。東北民族学院については筆者の現地調査に基づく。
- 20) それは、50年代ソ連モデルの専業制度を導入し、特定の産業技術に直結する極度に細分化された専業での教育を通じて、当該分野に関しては大学卒業後すぐにも専門家として働きうる人材の養成が迫られたからである。一つの専業では、卒業後に予定される職業に必要な知識だけを学生にいわゆる「狭く深く」学ばせることによって、卒業直後からその分野、その職業で活躍できるようにするために作られた制度である。現在この制度に対しては、「狭すぎて応用がきかない」という批判が投げかけられている。また近年国家が専業に基づいて学生を「適切な」職場（単位）に「分配」という制度は解消された。だが、にもかかわらず、その根本原理—市場の需要に基づきつつも国家が専業や人数を増加・減少させること—は現在でも変わっていない。したがって、専業の内容から職種の傾向がおおよそわかるのである。
- 21) 西南民族学院でも漢族の学生数が第1位を占めていることが、学生とのインタビューで明らかになったが、正確なデータについては資料を入手できなかった。
- 22) 卒業生がゼロの年があるので、5年ごとの区切りになっていないところもある。
- 23) 辻康吾『中国考現学』大修館書店、1992年、31-34頁。
- 24) 周傑晶等「中央民族学院師資結構分析及対策」『民族教育改革与探索』中央民族学院出版社、1989年。
- 25) 騰星「对中央民族学院教学改革的调查与建議」『中央民族学院学报』1986年第2期。

- 26) 現在の大学入試は全国統一であるが、実際学生選抜は省別になっている。そこで学生数について地域別に操作することは可能であるが、民族までは限定できない。そうすると少数民族地区と言われる地域でも漢族の学生がほとんどということもありえるのである。また、民族学院が学生の出身地域を指定できるといっても、質の向上を目指す以上、これまでの教学経験をもとに学力の低い地域の学生を大量に入学させようとするのではないであろう。
- 27) このジレンマの一つの打開策は、少数民族学生の教育年限を延長させることである。民族にこだわった人材養成を行いたいのが、現行の入試の上で多少の特別措置をつけても一定水準を満たした人材を供給できないとなった場合に、民族班という制度が導入されることになる。人材養成が不可欠という点と一定水準を保った高等教育機関という矛盾の妥協点にこそ民族班が誕生する契機があったのである。

Changing the Concept of "Ethnic Equalities": through the case of Institutes for Nationalities in China

Yoshikazu OGAWA*

This paper examines the meaning of "ethnic equality" by analyzing Institutes for Nationalities (IN's) in China. Although it is often said IN's are symbol of "ethnic equality", the validity of this has yet to be proved. It is, however, an essential component in identifying education in China.

Yanan Institute for Nationalities was created as the first institution for training minority leaders during the anti-Japan war era by the China Communist Party (CCP). At that time CCP recognized the need for minorities' help to achieve victory in the war. After the war, CCP built new China, and CCP continued to need the support of minorities' leaders in order to live up to the principle of minority autonomy. Therefore Institutes for Nationalities were established again in Beijing and have been expanded to 13 Institutes so far.

IN's were often identified by newspapers or magazines as symbols of "ethnic equality". They always emphasized differences between the minorities whose students study and live in IN's while helping each other. That is the first image of "ethnic equality". Therefore the more minorities are included, the greater equality become.

After the Cultural Revolution, CCP's policy changed to economic development. Its policy to minorities was to abolish economic differences. The meaning of the change in IN's is now also to abolish minorities' low abilities. That is the second image of "ethnic equality". So IN's have changed radically from training political leaders to training technicians. Specialties in IN's expanded to include social science and natural science. The number of 4 year undergraduate students has become more than that of other students such as 2 year students or adult students. The number of the majority Han students was also growing radically in these years. So the meaning of "ethnic equality" changed from stressing differences to abolishing them.

IN's, nevertheless, cannot ignore emphasising first image of "ethnic equality" and need to keep the balance between the two to develop themselves.

* Research Associate, R.I.H.E., Hiroshima University